

戦争を知らない子どもたち： 老人がつくる健やかで 和やかな社会



函館市医師会
老人保健施設

あかまつの里ななえ

大村 和久

アメリカで新たな共和党大統領が就任してより世界が騒がしくなり、中学時代に体験したキューバ危機以来の緊張感が漲る。

私は、第二次世界大戦／太平洋戦争後の昭和21年に、道南の七飯町にあった北海道国立第一病院の官舎に生まれた。両親が「平和が久しくあれ」と望み、誕生が3月6日の戦前の「昭和の地久節」であったことから『和久』と名付けられた。戦争を知らない子ども、団塊の世代の一期生も今年六回目の戌年を迎える。

私は、母が産後間もなく結核に罹ったため、母の実家のある東京の市ヶ谷に住んだ。昭和20年代中頃、物は乏しく、メンコやビー玉遊び、新宿の破壊されたビルのホテル浴室跡からモザイクタイルを拾い集め、空き地で地面に三寸釘を打ち、陣取りをした。小学校の低学年では、近所の悪童と一緒に廃材や竹で鉄砲、刀やパチンコを作り、騎兵隊や鞍馬天狗ごっこをし、路地で2B弾やカンシャク玉を破裂させ、近所の大人に「うるさい！」と怒鳴られた。

今は子どもが独り外で遊ぶ風情が見られない時代となり、統計では、現在総人口に占める高齢者人口の割合は27.7%と過去最高となった。世界一の老人大国である。更に30年ほどで高齢人口は38%台までに上昇するが、同時に「多死社会」を迎える。2046年以降は老人／生産年齢人口は均衡化し、潜在扶養指数は安定すると言われる。私も寿命があれば100歳を超えるが、どのような社会が到来しているのか。

WHOは、健康の三原則を「身体的、精神的、社会的に健やか」と定めている。見渡すと健康なご老人も多い。日本老年医学会では「身体能力、健康状態、知的能力は、10年前と比べると既に5～10歳若返っていて、元気な高齢者が増えたという国民の実感にあっている」と述べている。健康は「社会的に健やか」であることを、老人はじっくりと考えたい。

高齢人口が若年人口を大きく上回り、高齢者福祉や年金等の社会保障制度のみで全老人を支える社会は難しくなっている。高齢者世帯の貯蓄現在高は1世帯当たり2,394万円との総務省の統計を見ると、健康に恵まれ余力ある老人は、体験を生かし子どもたちをサポートし、孤立した老人を支援してほしい。世界一の長寿社会に見合ったライフスタイルと価値観を携え、実践する社会が望ましいのではないかな。

孫も9人となり、アシュラマにある家住期の任を

終え、医療も継承し、林住期に入った。老いた医者
の長年の体験から65歳で発心し、さわやか福祉財団
堀田力氏の賛同も頂き、インフォーマルケアを行う
多世代型NPO法人「NAOみちくさ」を立ち上げ、傾
聴活動をベースに地域の方々と学生らと活動してい
る。

行政や老健施設とも協働し、行政のボランティア
ポイントを活用、管理栄養士の提供する温かな食事
を自宅へ届け歓談する配食活動、また認知症カフェ、
地域サロンなどの活動では、行政や社会福祉協会の
後援を受け、大学や教育機関、法律や宗教関係の
エキスパートの方々を招き、ご老人の身近な課題を
医学、法律や宗教的観点から判りやすく説明し、生
活ですぐに役立つリスク管理の講演会や座談会を催
し活動している。

ペシミストといわれたショーペンハウエルは、老
齡期にはオプティミストになれると述べている。そ
のために必要な条件は、「年齢をカバーする健康」
と「リトル・マネー」であると述べている。

健康なご老人は社会保障を若者に譲り、レイモン
ド・キャッテルの唱えた結晶性知能を活用し、老
いの知的社会資産を若い世代にバトンタッチする
「少々の世間への恩返し」は如何なものか。日本は
リオ・オリンピックの陸上400mリレーで、絶妙な
バトンタッチで銀メダルを獲得した。その日本老人
なればこそ、知的社会資産を若人へ継承したい。

幼い頃内科医で海軍大佐だった祖父は、日清日露
戦争の白兵戦の話で「銃弾を打ち尽くすと銃身に銃
剣を刺し突撃する。その時、赤鬼か青鬼の形相にな
る」と、恐ろしい顔で幼い私を怖がらせ、戦争の異
常さを教えてくれた。また20歳を超え医学生になっ
た頃、「近代日本は明治以来、戦争なしに20年を迎
えたことはない」と語った。

いま戦後70年を超えたが、戦争の足音が遠くから
聞こえてくる。皆が国の在り方を深く考え、若い世
代に戦争を体験させない健全で和やかな日本国を保
ってほしい。

新年を迎えるにあたり、これからも老若を交え、
地域の身近な課題とともに、健やかで和やかな国
の在り方もじっくり語り合いたい。

